

新羅志 四篇

79. 12

利9  
3869  
31





新羅志 四篇

利9  
3869  
3/



特  
利日  
3869  
31

折句

冠

五文字

# 歌羅衣

四篇

大正七  
室升平藏

## 丹頂齋藏

寺

歌羅衣四篇序

俳風乃句鏡抑はそ能出徳

可此と可字少後了引了出能

之の景あやまらぬ初篇序

中一の中あまのささみちその

得あし能きとさしはせあ



黙然其手の手に加へて  
ささりと小冊を著して  
其の西の在りて諸君子乃力  
あるを操出ん地をそのお手  
もさるるを然と云後を備  
て追て余り拙を著す

まづ心を静かにし以て  
吟詠を満す之法を多し  
りて之を願ふ事多し

丹頂齋一齋述玉任

天保八年酉秋





丹多不人  
禮

歌羅衣四篇

折句題 ニサツ



遠き舟に四小筋もきえそ交り  
 松達寺さしふる船の達も秋  
 正草の松風よ壺目程の舟  
 晴くまや西郊 庵よ改元法外  
 埜もさつさちを流り中妻 澄々  
 酒中花をさる色しよまのさる管の子

浅州 五 東  
本邦之 吟多樓  
全以下 泰 窓  
伸田 東 旅  
浅中 岡 又  
大石老徳 賢 止



瘠し氣もあつゝぬ非の勒用  
白く家根濁ふ思ひもはゆる香  
呵て差さけ終着の柄うおまらや  
非前をぬく せつゝく流の流

林四

龜甲

一玉

林二

谷泉

向三

松雨

同 八才

判 ありをせく 香の妻  
葉 附は風をさうらう川を  
踏子 靴も 楮トウら  
はくく 妻の九く 裁物

本語四

二刀

喜心

其月

本二

園松

左在結

美雄

冠 冠 細

細川を家根を子ねむき  
細流を大根ふ得る 練る川  
細くむきも母の葉ふ入と 嫁  
細のなみ字もち地うらの 伴地磨  
細長く 路次を解義の 纏巻ひ  
細くならくと 妻実を川も 茶や

中ハジ

十瓶

向三

松太老

版四丁

久馬

少舟三

舟宇

非四

如氷

徳利

同 丸

丸 観 屋ふ出 務ちの 坊を 草

地ノ場

盃洗



丸除状く揚下女の長柄砂  
丸布糸袋て尾まの猫七痺  
丸合羽袖まき道ふ迷くまを

非田

向ヶ丘

五葉

新丸

徳利

折込題 物仕

非田

四角

本浪二

一泉

向ヶ丘

静林

中

静志

松太老

五字題 猿まの

後をみ伏けをづて居

東三

ソド

龜山

口三味線て音く稽くせ

ソド

彌楽

今よ寐ぼる枕をさづく

ソド

龜樂

同 みがく

椀の井へ着てあつて糸つと

名山

夕キ

二階のくらふをまをとりり

神田

園松

徳 入門 を 押 ぎ

水舟

八鬼

江戸も赤も口元トの習い

三

柏枝



舞臺のしり

若しはむ掃ゆ書の名

玉住

折白題 四スラ

屏風吹ぶよまの刻の笑と白湯

去百廿

金星

一ト筋條よ建屋をあらけ縁

十舟三

谷泉

板の目ふにふ子は袋をあうと

十舟三

関籠

引るぬ村角力喧嘩よ若りし夢連

一玉

一ト夜明すも力を利と面白

去百廿

團松

引く布急せし完業を重臣旋

去百廿

茗丸

日マツ

松葉切りきる對のこころ子

盃洗

若し赤な煙とくく口の子粉

如水

松原くさるもけり。一ツく

十瓶

早の遠きふ書表むむ徳り

乙刃

冠題 咏

呼ぶ業を江戸の一ト云は口の内

松太老

呼ばれを緇骨も捨りし甲

孫楽

呼ぶは後トあつらふに向く思ふ書

春急



鳴りくくも... や... 山... 舟...  
鳴りくくも... 舟... 山... 舟...

徳利  
後丁  
後丁

日金

今柑のりりのむ... 今級の... 金龜山... 今根入りの...

徳利  
柏枝  
龜  
登  
石

折込 多虫

掛... 折... 多... 女多... お目...

田中  
編  
花

多町の... 伯父が... 五字題... 大小... 色...

久馬  
寛坊  
松  
龜  
甲

大... 色... 寄... 寄...

夕キ  
賀重  
五  
来



五字送 孔明く

別義の茶の席一振き

一泉

小西の拂をうい言下て延し

龜山

むくくの舞をとりて拵りせ

園入

冷やくとをさそめ

王住

時ふあう此の子

折句送 ハツ知

初考の鼓お首尾ある子も静

旭

早靴を速し少紙多く小刀を

通之

着ハ海 毒あましく名もあま重

命馬

花いまど蒼き寺の児撫

志孝

箱いまど毒の症持も来るる多

盃洗

春ハ六ツてお祝ひの子ふれ老

木丸

判ハ医の傳彦殿りる子ハ毒あり

奉坊

掃ある毒むあところの子ふい言

路蝶

場所うらの毒湯を序ふも後劍

上盃

半切しと強く粉代ハハ蛇後そ

鳩二

六



清らとる後のあふさるる水

静志

母も今日 花さけり子もあはれ

笑止

新花の粧い 妻の乳首もやと

一玉

妻の糸色 づらりと花のまをなほ

新川 和光

早泊り連 お後にもみ代り

徳利

日カス

勝つし 娘もえふありの

賀重

貸は子 拭乃耳も垢摺り

子葉

髪て 流るる川の流れ

行丸

冠題 青

青木町 所落女 舞具の百味

谷泉

妻海苔の 香りまるとは 鞠子

糸ハシ 龜童

青き 迎江 湖水も 風の糸

松子

妻きよふ 人も 後まのこころ

稿守

青きついで 志をせり 送り

弁字

青蓮の 香るるよ 風も 妻は

一泉

妻も 桐や 寸斗 見えとく 妻の色

如水



日 吹

吹壳のそく溜りまめは旅の依

佐利

吹とに旅路静〜女礼

松百

吹く風も春思雪を包む暮

横山丁

花芳

吹く春風まわつて日ぬち延る旅

久馬

吹抜の風流くのけ文字も旅

松太老

吹竹のやれま〜と揺る妻

園入

吹壳とす〜きせらる旅杖

五耳

吹ま〜る旅あも旅のこもれ旅

浮来

打込題 梅鳥

ハヤ梅ハる取が〜乃古〜唄

寛坊

哀り塩梅口先キも花を〜

青山

何房

多遊も梅もを食の歌〜

木石一

和洞

梅本〜一ノ香居を越え〜玉

井田

松太老

一ツ春を〜後折結て梅の道

松林下

東木

萋乃遠き〜るる埋め梅の花

材居

丹一梅印〜日坊〜一ノ枝のる

龜甲

五字題 此事



一ト幕えくくちるもか書と

神内

在常

正月と削りこのちりく

本二

一委

申すうさんぐめいと言ひし

本二

函石

日老の病を治させてさう

本二

函山

十ヲ雲子て過常拜と

本二

龜乐

岩本院も洞よむせび

本二

秩峯

日 花やの

本二

阿

古い踊り乃妻さう振ひ

本二

泰窓

小田原の立居て四を舞ひ

本二

東柳

百寔掛と傳中り掛ひ

本二

東柳

花やの山あききよ

本二

玉住

振うあきび

本二

玉住

折句題 クサキ

本二

松雨

病のそいしを流る極長白

本二

木丸

思よ留鞘 袴もきまうと日

本二

披煙

苦いまこと 浅い内籠と病と病

本二

松太老

汲色茶棧か 尻りの浅ル鶴

本二

旭

葦酒許さぬとたりの門の飛

本二

旭



葉の子葉を日挽てねきるを(葉) 九  
葉の戸や清く濡らさるるの夜  
中を流るる水の息をわかれと風  
配る花さびる子呼出のまを(葉)  
鳥芋(葉) 向葉  
おの子のこぼれはまを(葉) 向葉  
噫、雪を(葉) 向葉  
雪れるを(葉) 向葉

梅枝  
踏踏  
吾吾  
釘丸  
志孝  
静志  
久馬  
徳利

日アヤ

挨拶流しおせ流し(葉)  
夕いする子も熱飲の幕  
嵩のお積りある(葉) 言上  
天宗原(葉) 言上  
細井(葉) 言上  
冠題 色  
色うめぬ雛ま(葉) 言上  
色香坊(葉) 言上  
色ま(葉) 言上

牛馬  
縮守  
上西  
盃洗  
通之  
賢止  
四角  
圈入



日取

多うあまてぢぶなふりこのおまふ  
取り提子ふい向う見てたり若  
ぬり分けあふ離れ降る娘  
ぬりまの籠栗の麻葛お

花巻  
柳枝  
一泉  
柏枝

折込 え先

襟えを先つらつらける月見丸  
帛崩も先陣う金る元  
お鶴まえ改う窓の先  
え服よお書を母のえあふ  
舌のえきんせうえ娘の抱るお  
又え下の見せえへあふ離

龜甲  
五束  
材居  
東木  
毒童  
吾象

五字題 残念

世あめ首をとほんとめい  
唇を布て 唇ら心  
見をあして 才トと切り

龜山  
東瓶  
賀重

日 吉事

清なるも なるくさのこ

龜乐



水子えの扇も折の紙  
きりきりつ 雀の飛んて来  
虫の好いとおぼしめし  
冠 ありまゝの言もあも

絨のたすき

玉住

折句題 イセハ

ききののりを 流基よ 襦袢  
辰列まぬ名 世話出けりよ 紋はぬ  
入 おおあまのれく 上はえの所

通之  
同鑑  
龜甲

今戸田地の 裨前く 這ふるのま

可交

糸の綾 ぬふきわたをて 糸花

園入

一敷 風を入まると 戸も肌をすな

木丸

きくく 口を後り 湯もあわの子

蜀春

歳をにせしや ちる子の 影せり

梅枝

多きや やあまの 見えは 針目高

和個

きけの 風ふる ちるけの ちるけ

旭

田今 柳移き 秋の 有る 影せり

如柳

徒ラの せく 版指を 影せり

苔泉



續賣りの道 續も巾着  
 音の部さん 少川くさ 箱  
 娘もあまハ一ト切の茄子  
 夜風よしらう 郷をえせらぬら  
 ハきよ日傘 女家く揃え  
 五葉 糸馬 河房 釘丸 泰窓

冠懸 扱

扱ける後子り 扱子扱しまあか多  
 扱るる色も月も 扱わ成河く  
 扱きく 扱る 水窮も 扱明て  
 扱りぬ 扱き 扱わ 扱子 扱の 扱  
 扱きさ 扱き 扱き 扱の 扱の 扱  
 扱き 扱き 扱き 扱の 扱の 扱  
 扱道 の 扱 扱 扱 扱 扱  
 扱 扱 扱 扱 扱 扱

日 通

通ひおけふ 通て 通ふ 通申の 通陽  
 通う 通ふ 通る 通ま 通報の 通青 通坪  
 通る 通し 通妻 通早 通之 通流 通谷 通屋  
 徳利 寛波 路 塚



折込題 石戸

出及よむりくは戸前の石蝶  
松子戸後辰石女の巻は柄  
飛ふハ唯持折戸よきと壁  
妻居くる戸張る上巻をこふとぞ

松太老  
久馬  
寛坊  
一泉

五字送 魚の

雪踏をちよみく上巻て歩の  
毛節をを肴柄よさく  
能子の留りよえつのが舞が

東瓶  
龜山  
弥生

日 秘事

辛の歩那とあまのりてあつき  
切れる雪焼く一巻を曲々  
尻ハ花菜の的よりてふ  
いせハ

毒樂  
披燦  
賀重

とまての操の併紙

玉住

折白歌 フレヨ

石の巻子法あしお針の巻まき  
船せまう一巻捲物して運ぶと致

丸家  
志孝



孝も道書も流敷くもあや  
 未しめふ未し書いよあぬ顔  
 節も道者も妹のゆきま  
 第近走る物あのを急ッ使  
 傳る日流噴を居ては徳所  
 筆虎りも四角も歩ゆまの徳所  
 船の舞老もまゝまゝ一薩子笛  
 風俗危り上手周ひの是飛り  
 果書性あまや陽陰一松と連  
 り〜り松子一母あまのきせり  
 少けるお拍湯兼い〜ふ中解へ  
 不首尾月流一志〜と切るほほ  
 薑おハ自後音の夜文け商  
 船も舞老も松をむらな松丸  
 善清ま〜と新親具あ〜と娘ら  
 舟〜と産つ子ぬ〜と母あ〜と  
 傳る流走り、は〜と茶をゆきあ〜と  
 肥るのハ承知日國の兼伝る

一泉  
 和光  
 松花  
 披煙  
 龜乐  
 和調  
 桐枝  
 桃花  
 新丸  
 野水  
 兜波  
 松太老  
 徳利  
 津原  
 阿房  
 寛坊  
 旭  
 如

新材寺

新川



あつた内記とてつらむ能事の子

関籠

日ハ子

毒のやうに乳あつたまむ子の鼻

一泉

鼻筋のやうにして摘脊するは

五束

裸しあつた付くやうな顔

青山  
る柳

坊敷踏子のさるい弱下駄

松る

羽織居替るつもの度き

東梳

冠り懸地

地生り道より向くと世の夏は

龜甲

地滴り音くあつた上は

福守

地と見る本綿燭具を

阿房

地細ッ活衣も柳湯つ抱への子

秋川  
龜年

地弾も多し後多し人の道を守

久馬

日 間

るも無く四ッ乳難ねし弾を

谷泉

るくの三陰戸も替る古取の

青山  
秦窓

るい紙も皺伸は母の首

花魁

る際ッ近云いぬ

所房



間流つ子城長幕ふ妻も腰

路蝶

折込題 柔筒

垢離場柔を院子う乳お筒守り

通之

まろくらの柔おをけも由軍筒

益洗

柔をの地刻りお筒守る松在り

銀光

土まの柔を牛角て舟呼夕日

森常

武太郎乃降を焼うせ

睡蝶

隣りの瓶お庚申を新うせ

洞江

園おの洞うる圃いを祝き

賀守

日 明白く

夕キ

赤まりハ一ト口を終ぐ新く

園入

物んど母織の地生をまじし、

材居

手を握ッてハ調子う合ハ新く

ハ鬼

足踏の泥を子供う洗い

玉住

地より新うと

好く子のる後惚

折勾題 カタラ



川鳴て立ッ日の敷の洋も水

神田

和調

かちうとあるふくまの人の酌

美園

斤口小出〜こッ割も搖る妻

苔泉

掛針もたるむち〜〜〜徳小登

松太老

駕二挺立場ふのり日の感う

和光

帰る者の被ふ者の揺る令

左宗

顔垂〜立ッ子の揺ふ聲も流

如柳

貝張りよも張とさうら平令京

弥樂

梳漬ふ〜酒よ火ある

如氷

門附の袂もきふ人たのり

其山

帰るとたのりの口舟の〜〜〜後子

菱一

敷の声小裁ッ子の揺ふ草物

吟多橋

蒲も揺む酒椀〜〜〜〜〜

園瀧

かちう〜〜〜〜〜入梅鳴々の干綱

盃洗

日 七 上

一ト口舟も群の揺る暑業

路標

日除ヶふあまを〜〜〜〜〜太 又 世

久馬

日除ヶ甚く〜〜〜〜〜通る夕河岸

東狐



彈く之味縁も遠き原風  
晝寐しこふふ何所へ無き夜を  
日傘の影け所ハ賓頭意

小石川

小石

松子

雲州

冠り題 黒

黒く顔をも役うくの宿る帯  
黒桐よ鈴虫の脚を茄子子  
黒と嬉茶よ花残る晝の帯  
黒息よ酒を依るる鬼灯を  
黒くあるは酒の味持く自らの  
黒杯の見其を 酒の清り白  
黒元結自味を色葉のつる齋

池端

河房

銀光

池鶴

児波

夏林

五束

日 樂

一 楽よおふケも ちまもは 藤汗  
一 楽よも書いたちのきれ 極小杯  
一 楽よの 娘とさるる 母と子と海で  
一 楽よとさるる 池端の 針仕る  
一 楽よの 國をよもさるる 舟十の 登  
一 楽よとさるる 別り 鶯郎

野川

龜甲

一 極花

一 五泉

一 徳利

一 寛流



折込題 少不

能業の如く一高の見る名不圖終  
甚るの書の数く少くせし  
唯力や一い宿帳の所書  
見所のの感や少く一い下地ツ子  
下戸ちうくくわく一い春ある場家の書

五字題 少不

美一結て一ツをい少入を  
油蒸場を門を流り  
あくきりく一い少の能書書せ  
店さうく一いの狎伴て登り

日 是えてん

松板給の石の若くで踊らせ  
さうかでも能く一い並ぶてあり  
系切道も應て一い喰らひ  
水が増はし

暖をくく

折句題 たツキ

寛坊 折丸 徳利 津源 梅枝

材居 龜山 泰窓

久馬 龜樂 園入 王住



中の酒つら〜酒つらののど〜後味  
 ころん酒〜清〜るも〜十〜千〜き〜ん〜瓦  
 見〜方〜け〜と〜美〜つ〜藏〜し〜る〜客〜の〜咽〜え〜  
 承〜き〜る〜也〜書〜わ〜火〜種〜の〜酒〜と〜院  
 見〜つ〜る〜る〜灯〜書〜針〜め〜ら〜お〜吉〜丁〜子  
 拵〜る〜毛〜の〜髭〜も〜因〜女〜の〜美〜量〜猶  
 牙〜幅〜を〜め〜書〜原〜く〜お〜る〜き〜り〜る〜衆  
 ろ〜そ〜あ〜ら〜せ〜し〜人〜の〜涌〜く〜浪〜園〜亭  
 直〜は〜根〜も〜は〜ら〜の〜妙〜業〜の〜の〜ど〜も〜書〜は  
 夏〜の〜そ〜る〜月〜は〜く〜く〜つ〜き〜り〜り〜り〜  
 荒〜尾〜その〜の〜露〜も〜麻〜き〜消〜く〜夢〜を  
 身〜と〜持〜て〜い〜つ〜き〜合〜角〜を〜和〜つ〜て  
 夏〜の〜末〜約〜ら〜れ〜軒〜端〜の〜切〜花〜え〜を  
 何〜の〜お〜か〜げ〜と〜も〜紙〜も〜よ〜お〜登  
 鳴〜く〜す〜鬼〜灯〜も〜奥〜透〜る〜客〜の〜鳴  
 見〜越〜の〜お〜く〜川〜つ〜ら〜る〜生〜辰〜痛  
 ち〜あ〜れ〜れ〜く〜客〜と〜あ〜い〜せ〜る〜路〜仕〜盡  
 生〜と〜あ〜る〜の〜書〜も〜あ〜い〜の〜行〜水〜湯

本三

通之 鬼子母 赤馬 覽波 東木 雲艸 松太老 飛牟 祈嬭 泰室 老忘 時源 園驪 池露 夏園 其山 柏枝

三



列島を旅するはつらむ御侍さま

日 八ハ

突見まじりてはしりし御母  
深むら馳走端し唐土の客  
井戸登りし御母の滝言ト

冠題 横

横眼を母に修めたるの後ろの段  
横向きより強ひを穿るるや御宿田連  
横小着着まきお物の四ハ波  
横目さしにたゆむるお物さしに唄と  
横ふさぎのぶら巾裏ふおのりさ  
横道多き太琉のすけぬ糸  
横よ所せせまの藤区る源真玉

日 折

折り飛り袖よる人よと家の糸  
折繼ことをはるききて母の捧ぐの杖  
折り曲と花むらさきの朝顔あ  
折るる新のはらも細く舞はせり

徳利

義園

梅枝

徳利

桃花

石泉

文馬

長太

忠孝

魚甲

雲禮

和柄

笑止

笑重



折込巻 中巾

中の方の布巾ニアの縁を  
さよの巾にスル一ツ道ふ巾  
中忌の龜を灸中遠世  
依ふもよ巾濡るふ小襦布巾

孝題 さくさく

佛のぢりりのお魔きさめ  
まよの悪縁よりなま  
浄古感うあき後を好  
あつちちと穴うあるワ

日 命

暑巾の依ふも久脚と  
和らな累丸をちま  
廻極く縁を約りよ  
橋るんかつそ切をと洗りせ

ハツキ 夏極や附あり

石三の經子藏

折句歌 フタツ

王 佳

五 束

衣 楓

龜 山

女 寺

治 棟

床 楽

飛 樂

置 入

材 辰

五 葉

寛 坊

至 洗



ゆらゆらと浮く泡盛の清い暑氣

龜年

舟ナちんちん高くとつて根城の目

春窓

舟ナちんちん高くとつて根城の目

柳紫

斑一ツ紅とる并の妻の宵卦

困てく

二日酔い酔ふる突の妻の情

鬼子母

舟の岸をこき屏風越し連の声

必多様

吹く古瓶 立ッ居る世活 撥をこ

撥煙

菟の毛の狸又分ちのるお宮

夏一

赤基無款の款よとて其書の人

旭

石中 秋見とく少相を机越し

久馬

踏んてらるる葎入川く月おき子

徳利

婦ッ付るくおまぬ舟の連れ行

義園

甚多色の中中とてまき書る子お

研交

伏せとる色玉の目方と書りて

松太老

舟の夕之と清る葉の忌け新

材居

日 二ホカ

志孝のそりよかきとる人そ指

志孝

仕掛又庫の替る秋風

亀甲



坊のお供々々  
舌や一巻の髪小膏る

母

新川

都多  
作馬

冠題 夕

夕ア字の痛も今朝の天窓割  
夕やけの熱くむやりと湯と太布  
夕アの蓮形物志こる田所の湯  
夕他新嫁湯とくちあある  
夕アといへ俄あかたる伴の所  
夕之小妻丸漬乃ちりり買  
夕りまうこそ湯急く書り延

卒所

羨 團  
久 馬  
琴 造  
雲 草  
徳 利  
夏 木  
石 泉

日 合

合イの依にいつて書るる縁  
合せりの目あなをよ渾く縁  
合幾の音やち書るやんが  
合紙字書か振袖をきく嫁  
合せりあふトメをくわ妻  
合せりのあれたるあ小撥ゆえて

幸ふ

臨 煉  
魚 洗  
文 子  
池 鶴  
弦 樂  
釘 丸

折込額 字雲



此集のきし世をくふの雲舟更田

五

一十志きし舟舟のきき雲の家

寛坊

袖をききし舟舟のきき雲の家

文子

多きし舟舟のきき雲の家

津源

五字歌 邪見

F 少きし舟舟のきき雲の家

園入

今ナ集のきし世をくふの雲舟更田

一 泉

欠々四て眼終と喰りせ

ノキ

日 かな

態々答わけてお送あめり

東 概

庵の瓢を社中りらき

夕キ

細く書と日記をのき

飛山

摺錦のやうお見えるぞ

観樂

非見黒りわいで

玉 任

まをを突つぎ

玉 任

折句送 レッ切

志々菊も積おせ秋の家を

丸 憲

十月二日練るやうに帰る舟

春 宗



おのれらんとて妻の愛する片は

天國

知らぬの未妻の余をよびて歩む所は

徳利

如もたしく清く酒席をいひて余を

津源

信徳のや月暈り昔も将の三

甚山

志のちうとに浮るる余を

牛馬

呵る目之面う神少裾のりぬと子

旭

志のれもそつと刺るる子とやう母

披煙

時る余を踏む少辰一雅あるは

七音

志のかりて振んて揺るる大なるし

千之

四五足のの細とつづつう紙巻

水

おのるるふ妻とて若くはなを

如

ま居見の妻の相文て門はあ

盪

あきふとつと接してゐる日の戸

盪

穉道するまづと袂とつと掃らう

二

あちち揚折とく地走りの帰り道

刀

日ハヤカ

八九寸焼鉛筆少拵ぬと秋

松花

えつとあつて肉焼く居るは焼菓子

松太老



禪りの目 仲居 少家 掛と在  
 ちさむ音 著流 して 角 小皿  
 針 止て 流く 子の 尾 小登 隣  
 冊 糸 葺て して へ へ へ へ  
 後 少ある やら 面白 掛り 合い  
 たら 清 菜 へ へ へ へ へ へ  
 寄 所 へ 周 へ へ へ へ へ へ  
 母 一ト 役 撮 を 村 へ 留 へ へ  
 河 へ へ へ へ へ へ へ へ  
 ち へ へ へ へ へ へ へ へ  
 初 の へ へ へ へ へ へ へ へ  
 剣 へ へ へ へ へ へ へ へ  
 走 へ へ へ へ へ へ へ へ  
 袴 も へ へ へ へ へ へ へ へ  
 日 スク  
 居 へ へ へ へ へ へ へ へ  
 例 論 の 母 へ 二 階 申 花

同入  
 文子  
 池 鶴  
 雲 巾  
 松 西  
 賀 重  
 文 花  
 寛 坊  
 和 調  
 可 交  
 珠 楽  
 徳 利  
 行 丸  
 棟 居  
 松 太 老  
 美 園  
 久 馬



好きして徳居の湫だとも兼  
杖の葉あつふやの流は  
流してあけりし葉子孟の葉

冠歌 奇

あるしとほふおりの形とをい  
あつふはるハのてあ 柳

あつふはる 徳小時ののれと  
家合過おは徳代の梅大花

あるあも能の中級のす  
家居中を耐てくき出仲同刻

日 巻

巻きごとくお成つては今の能が  
巻紙をきつてはつらせはあ付て

巻舌はよける浮懸の年  
巻くあたよあつらるる子も母の縁

巻ける著水胎のあつらるる  
折し題 月 異

先ッお持つてせと茶あふあく窓の月

五来

本九

孟洪

一泉

多春

龜甲

東流

徳利

樵花

其心

東本

羨楽

志孝

龜年

士乙



欺に三枝月代おとす

サナ

都香

糸をよみしつて舞のまゝる戸目見

五葉

長家建兵衛きんぎょむ月團ひ

狭岸

傘あぐろ小月を見る秋の夜

琴造

五字懸 犬と猿

成田道なるたり一曲り

八鬼

肩衣で髪をかきとる

文子

阿づ川と濁白川の連ど

園入

檜と柏の枝葉う移れ

柏枝

日多

貰ひぬ連へも花をおとせ

池原

太こと〜と腰斗を配り

飛山

函り符 帳のうらて巻かせ

飛亭

居あんとおろしをてとてま

狭池洲

十瓶

糸七百一 着をかきさみ

月置

日 深切

袴の破を前へと

通

扱けるやうなお取をく

三十

飛樂



たりの肩へ川つりけて送り  
夕キ

ハガ汁の傍々きおろぐく厚の縁  
玉住

冠りあり及もあして今年とわひ違  
日

大棟二下乃るどのおアグつどち  
日

歌長衣四篇 終

後篇追々出板

日本橋北通十軒店

# 江戸書林文苑閣藏版目録 播磨屋勝五郎

## 頭書 四書略解

蘭溪先生著 附録共 全十一冊

世ニ俗語ニテ經典ヲ解ノ書多シ然レ未一モ童蒙初學  
ノ爲ニ其要ヲ得モノナシ今此書ハ解トコロ約ニシテ能其本旨  
大要ヲ明ニスルト至テ深セナリ且上層ニハ本文國字ヲ注  
其間ニ古ノ宮室器物ノ類ヲ審ニ圖シ言ニテ解難モノヲ  
シテ一目ニ瞭然ナラシムサレバ舊來行ハルモノトハ實ニ  
天地懸隔ニテ唯童蒙ノ早夕道義ヲ發明スルノミナラス  
講義ヲ試ノ人モ其益ヲ得ルト少カラザルナリ故ニ海内  
ノ人家必一本ヲ貯ヘラレベキ書ト云ヘシ

五  
手



